

日本の歴史 10

稲垣 宏行

『信玄の戦略：組織、合戦、領国経営』 柴辻俊六 著（中央公論新社） v, 250p. 18cm

弱冠 21 歳にして甲斐国の守護となり、信濃・駿河・遠江を手中に収めた武田信玄。後に、彼は三方ヶ原で徳川家康を敗走させ、織田信長をも畏怖させました。軍事面だけでなく、交通路の設備、治水事業や金山開発など自領の整備・増強にも力を注ぎました。その一方、武田家の親族から成る親族衆、北条・今川など大名間での政略結婚、京都の各宗派の寺院や公家との交流といった、自家の権力拡大にも余念が無かったと言います。信玄は軍事面においては、敵対大名との直接対決を極力避ける行動を取っていました。彼は、諜報戦略によって敵軍の裏切りを誘発させるという手段をよく使っていたと言います。特に『甲陽軍鑑』『勝山記』といった文献、発見された武田家の書状から見えてくる信玄の頭腦的な「戦略」と、領国経営のあり様が分析されています。

210.47-Shi

『土一揆と城の戦国を行く』 藤木久志 著（朝日新聞社） 292p. 19cm

著者によれば、土一揆は一般に「正当かつ正統な百姓一揆の作法」であると考えられてきました。しかし、土一揆は実際のところ、生きのびるために略奪や放火も辞さない暴力的なものであったと主張しています。また一揆が起こる背景には、自然災害と戦乱による略奪行為によって引き起こされた飢餓の存在がありました。しかも、戦国大名たちもこのような略奪行為をある面では容認していたと言います。彼らは、敵国に被害を与えるための戦略的意図や恩賞の代わりとして暗黙の内に認めていたとも述べています。そして、そうした略奪行為に長けた兵士の存在があったようです。またこの時代、領主たちですら手を焼くほどに百姓たちに強い自立意識があり、武装度も高く、山城をも持っていたという事実も著者は挙げています。本書では、そんな戦国時代に生きる人々の姿が、各地に残る資料と実地調査によって紹介されています。

210.4-Fuj

『もう一つのハンセン病史：山の中の小さな園にて』

加藤尚子 著（医療文化社） 16, 290p. 22cm

ハンセン病補償法が成立したのは、今から 6 年近く前の 2001 年 5 月。その間患者たちは隔離政策をはじめとする差別に悩まされてきました。そんな中 90 年近くにわたって患者たちに親身に接してきたのが、山梨県身延町にある身延深敬園^{みのぶしんまうえん}という療養所でした。

この身延深敬園が創られたのは、創設者である網脇龍妙氏がハンセン病の少年に泣きすがられ、見捨てられなくなったからだというのが始まりだと本書に記されています。そして彼の娘である網脇美智さんは晩年まで患者と接してきました。彼女が療養所の院長を務めていた当時、日本は太平洋戦争の最中にありました。食料・医薬品の入手が難しく、戦争末期には空襲にも脅かされる時期でもありました。また身延深敬園も貧しい療養所でした。しかし園長の美智さんは、父が残した言葉「我深く汝を敬う」を胸に、患者たちに母親のような親しさで接してきました。本書は網脇美智さんの生の言葉と思いを忠実に再現しています。

498.6-Kat



いながき ひろゆき（係・情報サービス課）